神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilue : Lu-xun's a brief history of Chinese fiction (XVI)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/942

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中國小說史略考證　第十六

中島長文

第十六篇　明之神魔小說（上）

1 奉道流羽客之隆重、以至鴻篇鉅製之胚胎也

『六略』寫印本にはこの篇及びこの篇で述べられた『四遊記』に關する記述は全くなく、『大略』鉛印本で第十五篇として補われた。魯迅はこれらの小說を小說『西遊記』に先行するものと考えたために、殊に『四遊記』中の『西遊記傳』を『西遊記』の祖本としたために、『大略』鉛印本で第六十篇の小說『西遊記』の記述の前に置いたのである。それは一九三五年に再版を出した『小說舊聞鈔』でも同じで、『四遊記』の一つ南遊記である『華光天王傳』は『西遊記』の前に位置している。しかしこの說に對しては『史略』出版時の書評に倉石武四郎博士の批判があり、その後に胡適「跋四遊記本的西遊記傳」（『國立北平圖書館館刊』第五卷第三期　一九三一年六月。のち『胡適論學文選』第三集、遠東書局版『胡適文存』四集三、長江文藝出版社『胡適論中國古典小說』に收錄。）が、『西遊記傳』は吳承恩

『西遊記』の删節本であることを言い、さらにその後そのころ相ついで起った所謂吳承恩本で最も古い刊本である世德堂本、また朱鼎臣『唐三藏西遊釋厄傳』、それに永樂大典本『西遊記』の發見などを踏まえて鄭振鐸「西遊記的演化」（『文學』第一卷第四號　一九三三年十月、のち『痑僂集』民國二十三年生活書店、『中國文學研究』一九五七年作家出版社、『鄭振鐸文集』第五卷一九八八年に收錄）が書かれ、吳承恩本『西遊記』は『西遊記傳』を承けたのではなく永樂大典本を祖とするとの說を立てた。そのために魯迅は鄭說を一應肯定して增田涉日譯本の序で、本書第十六篇の所說を訂正すべきだと述べている。魯迅はその後『史略』には大幅な改訂を加えていないので、實際手を入れたとするとどのようになったかは分からない。ただ鄭說に從うとすれば、少なくとも『西遊記傳』の扱いは、所渭吳承恩本『西遊記』の末流とすべきで、他の三遊記も判斷の資料に乏しいけれども、明初には溯らぬと考えれば、この篇全體の價値は大幅に減じて、第十七篇『西遊記』の末尾で論ずれば濟むものとなろう。但しそうなったところでこの篇のこの節は『西遊記』その他神魔小說の導入部として生きることは言うまでもない。

「極顯赫」を『大略』鉛印本は「入朝列」に作り、『史略』初版で現行となり、「熠耀」は鉛印本で「赫然」に作り、初版で現行となる。「同源」の括弧は鉛印本になく初版で附加。「混」は鉛印本からすべて「溷」であったのを五七年版全集で「混」と通用させた。「巨製」の「巨」を鉛印本以來「鉅」に作るが、新版全集で改める。「胚胎」は鉛印本で「萌芽」に作り、初版で現行となる。

方士「李孜」は正しくは「李孜省」。これら方伎雜流で成上つた者たちの傳は『明史』三〇六佞倖列傳に見える。そこでは于永は「回回人」とされており、『史略』の「色目人」と矛盾はしないが表現がちがう。「李孜省」の脫字ともあわせて、この部分の記述は別に據る所があるのであろうが未詳。管見に入った『萬曆野獲編』の記述だけを後に

舉げておく。

「中國小說的歷史的變遷」第五講「明小說之兩大主潮」全集第九卷云、上次已將宋之小說、講了箇大概。元呢、它的詞曲很發達、而小說方面、却沒有甚麼可說。現在我們就講到明朝的小說去。明之中葉、卽嘉靖前後、小說出現的很多、其中有兩大主潮。一、講神魔之爭的。二、講世情的。現在再將它分開來講。

一、神魔之爭的　此思潮之起來、也了當時宗教、方士之影響的。宋宣和時、卽非常崇奉道流。元則佛道幷奉、方士的勢力也不小。至明、本來是衰下去的了、但到成化時、又抬起頭來、其時有方士李孜、釋家繼曉、正德時又有色目人于永、都以方技雜流拜官、因之妖妄之說日盛、而影響及于文章。況且歷來三教之爭、都無解決、大抵是互相調和、互相容、終于名爲「同源」而後已。凡有新派進來、雖然彼此目爲外道、生些紛爭、但一到認爲同源、卽無歧視之意、須俟後來另有別派、它們三家才又自稱正道、再來攻擊這非同源的異端。當時的思想、是極模糊的、在小說中所寫的邪正、幷非儒和佛、或道和佛、或儒道釋和白蓮教、單不過是含胡的彼此之爭、我就總括起來給他們一箇名目、叫做神魔小說。此種主潮、可作代表者、有三部小說。（一）『西遊記』。（二）『封神傳』。（三）『三寶太監西洋記』

魯迅「日本譯本に對する著者の言葉」云、〔前略〕だが、積習はやつぱり除き難いものらしい。小說史に關することは時としてまだ注意を向けることもある。そのやや關係の大なる事を言へば、今年故人になつた馬廉教授は昨年殘本の「清平山堂」を翻印して宋人話本の材料を豊富にした。鄭振鐸教授は「四遊記」中にある「西遊記」は吳承恩の「西遊記」の摘錄であつてその祖本ではないことを證明した、それは拙作の第十六篇の所說をも訂正すべきもので、その精確な論文は「佝僂集」の中に收錄されてゐる。もう一つは北平で「金瓶梅詞話」が發見され今まで通行してゐた同書の祖本であり、文章は今本より粗雜だが對話はみな山東の言葉でかかれ、決して江蘇の人、王世貞でないことが確

實に證明された。／併し自分は改訂しないでその不完備を目撃しながら放置し、而して日本譯の出版に對してよろこんだのである。が何時かこの無精の過ちを補ふ時機のあることを願ふ。〔後略〕一九三五年六月九日燈下サイレン社版。

『萬曆野獲編』二七云、我太祖崇奉釋教、觀宋文憲蔣山佛會記以及諸跋、可謂至隆極重。至永樂、而帝師哈立麻、西天佛子之號而極矣。歷朝因之不替。惟成化間寵方士李孜省鄧常恩等、頗于靈顯濟靈諸宮加獎飾。又妖僧繼曉用事、而佛教亦盛、所加帝師名號、與永樂年等。其尊道教亦名耳。云々。

又二云、成化間、方士李孜省、官通政使禮部左侍郎掌司事。妖僧繼曉、累進通玄翊教廣善國師。正德間、色目人于永、拜錦衣都指揮。皆以房中術驟貴、總之皆方技雜流也。

2 彙此等小說成集者、以至民間傳說作之 一五四—八

『大略』鉛印本と『史略』各版に異同はない。

『史略』に「今有『四遊記』行于世、其書凡四種、著者三人、不知何人編定、惟觀刻本之狀、當在明代耳」とある所から考えれば、魯迅が見たのは清道光十年刊本の『四遊記』とさらにのちの坊刻本であったらしい。刻本の様子を見て明代の小說だというのは、上圖下文の形式を保存した道光十年刊『四遊記』からの推測であろう。『東遊記』の現存する最も早い刊本は、明萬曆中余象斗刊本『全像東遊記上洞八仙傳』（二卷五十六回　內閣文庫藏　いま古本小說叢刊第三十九輯收）で、「蘭江吳元泰著　社友凌雲龍校」と題し、封面には、「書林余文台梓」とある。版心には「全像八仙出身東遊記」「八仙出身東遊記」「八仙出身傳」「八仙出處」などとあり、また單に「八仙傳」とも言い、書名は一定しない。この刊本には余象斗の引言があって、「不佞斗自刊華光等傳、皆出予心胸之編集、其勞鞅掌矣、其費弘鉅矣。乃多爲射利者刊甚。諸傳照本堂樣式、踐人轍跡、而逐人塵後也。今本坊亦有自立者固多、而亦有逐利之無恥、

與異方之浪棍、遷徙之逃奴、專欲翻人已成之刻者、襲人唾餘。得無垂首而汗顏。無恥之甚乎、故說。　三台山人仰止余象斗言。」と言う。商賈丸出しの言であるが、こうした小説本がそれほどよく賣れたということでもあろう。ここには確かに「華光等傳」と言い、且つ『南遊記』『北遊記』はともに余象斗の編であることがそれらの刊本から確認されるのではあるが、これらの諸書刊行當時に「四遊記」という形で組で四部作を爲していたとする證はない。もしもシリーズが四部で完結するという認識があったならば、これほど版權所有を主張する文に於て一言の言及もないはずはなかろう。東西南北で四部作としたのは恐らく後の淸人で、嘉慶十六年序刊本『南遊記』を含み、それぞれに刊行者の異るものを集めた道光十年刊本がその最初のものではなかろうか。魯迅は『史略』以外でも余象斗の序には觸れないから、彼が見たのは嘉慶本以降の覆明本だと考える。『史略』はこの書の又の名を『八仙出處東遊記傳』とするが、普通には「傳」字がないから、衍字でなければ、彼が見たテキストの特定の手がかりになるかもしれない。但し今の所そう題するテキストの存在は確認されない。なお余象斗刊本『東遊記』の巻末には「大唐眞人呂純陽」（つまりこの小說の登場人物の一人、呂洞賓）というまったく人を食った署名（でなければ呂純陽の再來を氣取ったのであろう）で、「桂溪昇仙閣序」「昇仙閣跋」「重鍥感應篇序」「蓬萊景記」並びに詩詞が附刻されている。「昇仙閣序」には「萬曆癸未」（十一年、一五八三）、「跋」には「萬曆乙未」（二十三年、一五九五）、「感應篇序」には「萬曆丙申冬朔後一日」、「蓬萊景記」には「萬曆丙申季秋越十日癸卯」の日附がある。署名はともかくこれらの日附は『東遊記』刊刻の上限を示すもので、「萬曆丙申冬」つまり萬曆二十四年、西紀一五九六年以降の刊刻ということになる。『南遊記』『北遊記』もこれと前後して刊刻されたと思われる。テキストには淸に入って道光十年『四遊全傳』本、同版によるとされる京大陶庵文庫本（『大塚目』）は上巻のうち第四回から第二十九回までは回數を表示していて、後の補刻

である可能性もある。また小蓬萊仙館『四遊合傳』本四十五回等がある。近刊の上海古籍出版社排印本（一九五六、一九八六）は出處不詳の刊本である。

倉石武四郎「新刊紹介『中國小說史略』」云、小說の版本には往々支那に於て獲がたくして、却て日本に傳來し保存されてゐるものがある。此より先胡適氏が水滸傳や西遊記を考證した際に、青木迷陽氏からさまざま日本に傳はる材料を提供してその研究を助けられたのは、藝林の佳話であって、この書の中に引かれた水滸傳の材料などは多くその流風餘韻に屬してゐる様だ。魯迅氏はまだ明の喩世明言の所在を知らぬらしいが、此は日本の內閣文庫に二十四卷の完本及び之と殆んど同じ內容を含める明版の古今小說四十卷を藏してゐる。その代りこの書に四遊記などはわが國では未だ所藏者あることを聞かない。こんな處は何とかして相互に影印でもして材料だけは何人でも自由に利用できる様にし度いものである。

珍本を利用する人は往々その價値を過大に見つもり過ぎる傾向があるものである。この書でも前述の四遊記を以て現今の西遊記の原本たるが如く見てあるけれども、單に記事などから推想するときは、有名なる西遊記が中心になって東南北の物語が附加されたものと見る方が穩やかさうに思はれる。華光や眞武から西遊記の材料が出たと考へる前に、西遊記の物語が南遊や北遊に窃まれたと判斷する方が近道ではあるまいか。水滸傳の英雄譜本が一百回本に先だつと云ふ說も未だ首肯するに足らぬ様に思はれる。それらの點はともかくとしてこの書に依つて支那小說が文獻的によほどよく整理されたことは爭ふべからざる事實である。〔後略〕『支那學』第四卷第一號・一九二六・八。

但し『支那學』のこの號が出たのは、ちょうど魯迅が北京から上海を經て厦門に向った時なので、彼が後からにしろこの文章を讀んだかどうかは未詳である。

3 二曰『五顯靈官大帝華光天王傳』、以至終歸佛道云

「二曰」の「二」は『大略』鉛印本では「一」に作る。また『華光天王傳』下の「、」は『大略』鉛印本、初版、合訂再版まで同じく、三版で句點となり、以後それを承けるが、五七版全集で讀點に戻された。「象斗爲明末書賈、……尚見其名。」の句は訂正版ではじめて補われ、次句の「書言……」の「書」字も文の接續の關係から附加された。「爲佛所執」の「執」字は、三版から七版まで誤って「報」に作る。引用文中「我兒、你救得我出來」の「我兒」下に『大略』鉛印本では讀點があったが、初版以降はすべて省かれた。しかしこれは「我兒」が行末に來たために讀點が脫落したのであって、ここは補った方がよい。「如何又要吃人」の「要」字、『大略』鉛印本から七版まで「想」に作り、訂正版で「要」に改められた。再び地の文では「爲火丹所燒」の「丹」は、『大略』鉛印本より三八年版全集に至るまですべて「舟」に作り、五七年版全集で「丹」に改められた。

引用文は明版、道光本とも上海古籍出版社本ともそれぞれに異同がある。引用文の回數を表示している所からすれば、魯迅が見たのは小蓬萊仙館版以後のかなり後の版であったと思われる。まず『史略』が回數を表示していること、明版、道光本ともに回數を表示せず回目のみであること。「鄴都」を兩本とも「豊都」に作り、「如何」を「爲何」に作り、「此事万不可爲」を「吃事決不可爲」に作り、「岐娥」を明版はすべて「陂娥」に作り、道光本は一部を「陂娥」に作るなど、明版と道光本は比較的近いのに對して、『史略』引用はむしろ上海古籍出版社本に近い。

近刊には「辛未歲孟冬月　書林昌遠堂梓」という刊記を持つ大英博物館藏本の景印が古小說集成（上海古籍出版社）に入った。「三台館山人　仰止　余象斗編　書林昌遠堂　仕弘　李氏梓」と題する。「辛未」を隆慶五年（一五七一）とするのは余象斗の仕事にしては早すぎ、昌遠堂は余氏の書肆ではないから原刊本でないことは確かである。ただ崇

禎四年（一六三一）あるいは清に入って以降の刊行だとしても版式から見て余氏原刊本の様態を傳えていると考えられる。

『魯迅藏書目錄』子部小說家類云、全像五顯靈官大帝華光天王傳　四卷　明余象斗編　清五雲堂劉氏刻本　一册。

『日記』一九三一年十一月二十九日に「午後同三弟往中國書店買『華光天王傳』一本、一元。」とあり、書帳にも同様の著錄がある。但しこの書による直接の知見は、『史略』には關わらなかったようである。

4 明謝肇淛以華光小說比擬『西遊記』、以至當時且演爲劇本矣　一五六十六

「比擬」の「擬」字は合訂再版で附加、「則致慨于遷善之難」の「致」を三版より七版まで「至」に誤る。文末に『大略』鉛印本より七版まで「惟書于何時始出、則未詳。」とあったのを訂正版で削除した。また「五行生克」の「克」字は、『大略』より五七年版全集まで「尅」に作り、七三年版全集で通行の「克」に改めた。

『小說舊聞鈔』『華光天王傳』云、（謝肇淛『五雜組』十五）、小說載華光天王之母、以喜食人入餓鬼獄。經數百年、其子得道、乃拔而出之。甫出獄門、卽求人肉。其子泣諫、母怒曰、不孝之子如此。若無人食、何用救吾出來。世之爲惡者、往往如此矣。

〔魯迅〕案：『五顯靈官華光天王傳』今亦名『南遊記』、在『四遊記』中。明代且演此種故事爲戲文、沈德符『野獲編』二十五）云、〔「雜劇如……」〕華光顯聖、目連入冥、大聖収魔之屬、則太妖誕」是也。

謝肇淛『五雜組』十五云、小說野俚諸書、稗官所不載者、雖極幻妄無當、然亦有至理存焉。如水滸傳無論已、西游記曼衍虛誕、而其縱橫變化、以猿爲心之神、以猪爲意之馳。其始之放縱、上天下地、莫能禁制、而歸於緊箍一呪、能使心猿馴伏、至死靡他。蓋亦求放心之喩、非浪作也。華光小說、則皆五行生尅之理、火之熾也、亦上天下地、莫之撲滅、

而眞武以水制之、始歸正道。其他諸傳記之寓言者、亦皆有可采。惟三國演義與錢塘記、宣和遺事、楊六郎等書、俚而無味矣。何者。事太實則近腐、可以悅里巷小兒、而不足爲士君子道也。一九五九年中華書局排印本。

5 其三曰『北方眞武玄天上帝出身志傳』、以至後來增訂之本矣。

一五六十三

「其三」は『大略』鉛印本で「又一」に作り、初版で現行に改む。「眞武本身」の「身」は『大略』鉛印本より合訂再版まで「生」に作り、第三版で「身」に改む。「玉歷記」初版から「歷」に改めるが、『大略』鉛印本に戻って「曆」に作るべきである。「玉帝當宴會之際」の「宴」は『大略』鉛印本から五七年版全集まで「醼」に作り、七三年版全集で現行に改む。「舍國出家」の「舍」は、『大略』鉛印本から三八年版全集まですべて「捨」に作り、五七年版全集で現行の如くされた。

『周禮』大宗伯云、以禋祀祀昊天上帝。鄭司農注云、昊天、天也。上帝、玄天也。

その疏も『廣雅』釋言の「乾、玄天也」を引くだけなので、六朝以來こみ入った議論はなかったらしい。鄭司農の注では、要するに『易』坤の言う「天玄而地黃」の、天の神格化に過ぎない。もっとも『呂氏春秋』有始篇には「北方曰玄天」とあり、天の分野である北天を指す說であるが、『北遊記』の遥かな淵源はそちらにあるようだ。

『三教源流搜神大全』一、玄天上帝云、按混洞赤文所載、文帝乃元始化身、太極別體。上三皇時、下降爲太始眞人。中三皇爲時、下降爲太元眞人。下三皇時、下降爲太乙眞人。至黃帝時、下降爲玄天上帝。開皇初劫下世、紫雲元年、歲建甲午、三月初三、甲寅、庚午時、符太陽之精、托胎化生淨樂國王善勝夫人之腹、孕秀一十四月、則太上八十二化也。淨樂國者、乃奎婁之下海外國、上應龍変變梵度天。玄帝產母左脇、當生之時、瑞雲覆國、異香芬然、地土變金玉、瑞應之祥、茲不備載。生而神靈、舉措隱顯。年及十歲、經典一覽、悉皆默會、仰觀俯察、靡所不通。潛心念道、

志氣太虛。願輔上帝、普福兆民。父王不能抑志。年十五、辭父母、慾尋幽谷、內煉元眞。遂感玉清聖祖紫虛元君、傳授無極上道。元君告玄帝曰、子可越海東遊、歷於翼軫之下、有山自乾兌起跡、盤旋五萬里、水出震宮、自有太極、便生是山、應顯定極風天・太安皇崖二天。子可入是山、擇衆峯之中沖高紫霄者居之、當契太和。昇舉之後五百歲、當龍漢二劫中、披髮跣足、攝雜坎眞精、歸根復位、上爲三境輔臣、下作十方大聖、方得顯名億劫、與天地日月齊并、是其果滿也。告畢、元君昇雲而去。玄帝乃如師語、越海東遊、步至翼軫之下、果見師告之山。山水藏没、皆應師言、乃入觀覽、果有七十二峯、之中有一峯聳翠、上凌紫霽、下有一嵓、當陽虛寂。於是玄帝探師之誡、目山曰太和山、峯曰紫雲峯、嵓曰紫霄嵓、遂即居焉。潛虛玄一、默會萬眞。四十二年、大得上道。於黃帝紫雲五十七年、歲次甲子、九月初九日、丙寅淸晨、忽有祥雲、天花自空而下、迷漫山谷、繞山四方、各三百里、林巒震響、自作步虛仙樂之音。是時玄帝、身長九尺、面如滿月、龍眉鳳目、紺髮美髯、稽如氷淸、頂帶玉冠、身披松羅之服、跣足拱手、立于紫霄峯上。須臾雲散、有五眞群仙、降于玄帝之前、導從甚盛、非凡見聞。玄帝稽首祗奉、奉迎拜五眞。曰、予奉玉淸玉帝詔、以子功滿、道備昇舉。今聞、子之聖父聖母已在紫霄矣。玄帝俯伏恭諾。五眞乃宣詔畢、可特拜太玄元帥、領元和遷校府公事。賜九德偃月金晨玉冠、瓊華玉簪、碧理寶圭、素銷飛雲金霞之帔、紫銷龍袞丹裳、羽屬絳綵之裙、七寶銖衣、九光朱履、飛紅雲舄、佩太玄元帥玉册、乾元宝印、南北二斗三台龍劍、飛雲玉轡、丹鞏綠韁、羽蓋瓊輪、九色之節、十絕靈旛、前嘯九鳳、後吹八鸞、天下玉女、億乘萬騎、上赴九淸。詔至奉行。玄帝再拜受詔、易服訖、飛昇金闕。

按元洞玉曆記云、至五帝世、來當上天。龍漢二劫、下世洪水方息、人民始耕。殷紂主淫心失道、矯侮上天、生靈方足衣食、心叛正道、日造罪孽、惡毒自橫。遂感六天魔王、引諸神鬼、傷害衆生、毒氣盤結、上衝太空。是時元始天尊、說法於玉淸聖境、天門震開、下見惡氣瀰塞天、於是妙行眞人叩誠求請、願救群黎。元始乃命玉皇上帝降詔紫微、陽則

以周武伐紂、平治社稷、陰則以玄帝收魔、間分人鬼。當斯時也、上賜玄帝披髮跣足、金甲玄袍、皂纛玄旗、統領丁甲、下降凡世、與六天魔王戰於洞陰之野。是時魔王以坎離二炁化蒼龜巨蛇、變現方成、玄帝神力攝於足下、鎖鬼衆於酆都大洞。人民治安、宇宙清肅。玄帝凱還清都、面朝金闕。元始敎命、以玄帝功齊五十萬劫、德竝三十三天。九霄上賴於眞威、十亟仰依於神化、有大利施於下民、積聖德遍之于玉曆。

按遵簡篠、當亞帝眞、不有徽崇、何以昭德。特賜尊號、拜玉虛師相玄天上帝、領九天探訪使。聖父曰淨樂天國君明眞大帝。聖母曰善勝太后瓊眞上仙。下蔭天關曰太玄火精含陰將軍赤靈尊神。地軸曰太玄水精育陽將軍黑靈尊神。竝居天一、眞憂之。葉德輝本影印本

この書、通稱を『三敎搜神大全』と言う。歷代の書志はまったく著錄せず。撰者來歷不詳の書で固より俗書である。清の毛晉の息子である毛扆が編んだ『汲古閣珍藏秘本書目』子部（士禮居叢書）に「元板畫相搜神廣記前後二集二本凡三敎聖賢及世奉衆神、皆有畫像、各考其姓名字號爵里及封贈謚號甚詳、亦奇書也。二兩」と賣價まで附けて著錄される書と異名同書だとされるが、書目の「元板」というのが事實なら必ずしも同書ではない。なぜなら『三敎搜神大全』には明の記錄が增補されており、それが明刊であることは明白だからである。引用される『元洞玉曆記』も來歷不詳の書だが、魯迅は玄天上帝が元明に祭祀されるほど著名になっていることから、宋代羽客の言だろうと推測したと考えられる。なお葉德輝の後序には「玄天上帝卽玄武神、見唐段成式西陽雜俎。」と述べる。もちろん「玄武」は先秦以來北方の神だが、『西陽雜俎』は龜蛇の玄武を言うだけであって、玄武神＝玄天上帝を言うわけではない。

『日記』一九二四年一〇月一〇日云、下午晴、至留黎厰寶華堂買『麗廔叢書』一部七册、『雙梅景闇叢書』一部四册、『唐人小說六種』一部二册、『三敎源流搜神大全』一部二册、共銀七元。」葉德輝が復刻した叢書の類をまとめて買ったの

である。ここでの記述もそれによる。書帳によれば『搜神大全』は一元であった。なお後には『搜神大全』は『麗廔叢書』に編入されるのであるが、當時は單行で復刻されたらしい。『魯迅藏書目錄』には子部道家類に「三教源流搜神大全　七卷　不著撰人名氏　宣統元（一九〇九）長沙葉氏影明刊本　二册」と著錄する。

玄帝眞武の元明に於ける崇奉については新版全集注が次のように述べる。「據『元史・成宗紀』載、元成宗鐵穆耳大德七年（一三〇三）十二月、加封眞武爲「元聖仁威玄天上帝」。據『明史・禮志』載、明太祖朱元璋于南京建廟宇崇祀眞武。明成祖朱棣永樂十三年（一四一五）于京師建「眞武廟」、每年三月三日、九月九日祭祀。」『五雜組』一五にも「至今香火殆遍天下」とある。なお三月三日は眞武の生誕、九月九日はその昇仙の日とされている。

この節で最も問題になるのは、最後の「篇末則記永樂三年玄天助國却敵事、而下有「至今二百餘載」之文、頗似此書流行、當在明季、然舊刻無後一語、可知有者乃後來增訂之本矣。」という論斷である。『北遊記』の舊刻でいまに殘る最も古いものは「壬寅歲季春月書林熊仰台梓」という木記のある大英博物館藏本（いま中華書局古小說叢刊第九輯）である。この壬寅は萬曆三十年（一六〇二）でなければ明が亡んだ翌年、康熙元年（一六六二）である。萬曆三十年は余象斗が『東遊記』を出したと考えられる上限の萬曆丙申二十四年（一五九六）からいくらも隔たってはいないから、熊氏刊行はおそらく康熙元年の壬寅であろう。この書は第一卷第一頁に「三台山人　仰止　余象斗編／建邑書林余氏　雙峯堂梓」とあり、二卷の初頁では「余象斗」「余」「雙峯」を削るが、三卷四卷は元のままになっている。このことからすれば、熊氏は余象斗雙峯堂刊行の版木を買いうけて增刷したものと思われる。『眞武傳』は余象斗の小引から考えても、彼が刊行したものを原刊本としてよいだろう。ところがこの熊氏刊本には魯迅がもとずいたと考えられる『四遊記』本と同樣に、「至我朝永樂爺ㇾ三年、黃毛搭子反來云々」の結末にやはり「天下万民、不論男婦小

兒、或有一步一拜者紛〻然而來、口念無量壽佛、万感万□。今至二百餘載、香火如初、永受朝拜、天下大太平。」と、いわゆる「後一語」を闕かないのである。影印本によっているので斷定はできないが、「今至……」以下が補刻のようには見えない。補刻でないとすれば、余氏原刊本にもそのように作っていたこととなる。それでは魯迅の言う「舊刻」とは如何なる書か。それは道光十年本である。京大陶庵文庫本はいわゆる「後一語」を闕いており、また趙氏『中國小說史略傍證』は「道光十年本所據的底本較古、似爲萬曆本、末尾無〝至今二百余歲〟之文」（七四頁）と云い、論斷は誤っているが、趙氏の見た道光本にもこの「後一語」がないことが分る。したがってこれは單に道光本がその語を闕いただけなのを、明版を見なかった魯迅も趙氏も道光本より舊刻にもそれがないと誤解したのであって、書誌に關するこの記述は削らなければならない。

『師弟答問集』四頁—四二頁云、〔增田涉問曰、〕「一九三頁ノ最初a玄帝收魔以治陰、「上賜玄帝……」玄帝ニ收魔ヲ命ジタモノハ、前頁ノ元始デ、且ツ元始＝上（上帝）デスカ?」〔魯迅答曰、〕「元始ハ「上」デナイ。「上」ハ玉帝＝天帝デス。命令ハ元始カラ与ヘタケレ𪜈御褒美ハ天帝カラ出サナケレバナラナイラシイ。」

〔又問曰、〕「b、……。初謂隋煬帝時、……上謁玉帝、封蕩魔天尊、令收天將；於是復生……入武當山成道。以上ガ卽チ玄帝ノ本身及ビ成道ヲ云ツタモノデ、成道シテ玄帝トナツタ譯デスカ?」〔魯迅答曰、〕「yes」。

〔又問曰、〕「c、最後ノ行、……玄天助國却敵事、…〔却に等號を附けて〕＝退?」〔魯迅答曰、〕「yes」。

〔又問曰、〕「d、一九三頁ノ間中、如來三淸並來點化…一九二頁ノ最後ノ行　元始說法於三淸、玉淸・上淸・太淸ガ卽チ三淸デ、イツレモ仙人ノ居ル府デアルト解シマスガ如來三淸並來點化ノ三淸ハ三淸ノ首領ノ意味デスカ又ハソンナ封號ヲ有ツタ特種ノ仙人ガ居ルデセウカ?——仙界ノ消息ハサツパリ分カリマセン。早ク仙人ニナツテ見タイ!」

〔魯迅答曰、〕「玉清眞人、上清眞人、太清眞人、コレハ三清ト云フ。コノ三清様ノ住居スル所ハ玉清宮……ナドト云ツテ玉清……ナドト云フ天界ニアリ。而シテコノ三清様ハタダ老子一人ノ化身デ――コノ難シイ化学ニヨレバ「如來三清」トハ實ニ卽チ「如來老子」ダ。」〔增田ノ最後ノ文ニ對シテ魯迅曰、〕「同感々々！」

6 四曰『西遊記傳』、以至亦得取爲記傳也　一五八―一〇

「四曰」を『大略』鉛印本は「一曰」に作る。初版で現行に改む。第三版で「題齊雲楊志和編……」に作られ、以後すべてそれを襲うが、これは『大略』鉛印本――合訂再版の舊に戻して、「題「齊雲楊志和編……」とすべきである。「（詳見第十二篇）」は初版で附加。「『佛藏』」は『大略』鉛印本では「大藏」に作り、書名を示す波線は附いておらず、初版で現行の如くなった。「（今有日本鹽谷溫校印本）、其中」を『大略』鉛印本以來第七版まで「倘『納書楹曲譜』（補遺一）所摘錄者卽此本、則」に作り、訂正版で現行に改む。又同様に第七版までは、「沙僧」「鐵扇公主」がなく、「猪八戒」と「紅孩兒」が顚倒し、且つ「紅孩兒」を「火孩兒」に作り、訂正版で現行の如くなる。『朝野僉載』の引用部分、「暫」に作るのは七三年版全集以後だが、意は同じくしても、これは原本及び『大略』寫印本から五七年版全集までの如く「蹔」に作っておくべきである。

『大略』寫印本二二、明之歷史的神異小說云、玄奘求經、由于太宗之入冥、入冥情狀、已見於敦煌石窟所出唐人通俗文中、朝野僉載亦云、「太宗至夜半奄然入定、見一人云、陛下蹔合來、還卽去也。帝問君是何人。對曰、臣是生人判冥事。太宗入見判官。問六月四日事、卽令還。向見者又送迎引導出。」而玄奘入竺、則載在唐書方伎傳、但無諸神異事。惟今所見大唐三藏取經詩話、已有猴行者及諸異境。元人院本名目中、亦有唐三藏（輟耕錄）唐三藏西天取經（錄鬼簿）等。似自唐末至宋元乃漸〻演爲神異故事流播民間。而此種話本及傳說明代或尙有存者、吳承恩猶及聞之、故其書間有

與宋人詩話相類者也。

「小說的歷史的變遷」第五講　全集九云、這部小說〔『西游記』〕、也不是吳承恩所創作、因爲『大唐三藏法師取經詩話』——在前邊已經提及過——已說過猴行者、深河神、及諸異境。元朝的雜劇也有用唐三藏西天取經做材料的著作。此外明時也別有一種簡短的『西游記傳』——由此可知玄奘西天取經一事、自唐末以至宋元已漸漸演成神異故事、且多作成簡單的小說、而至明吳承恩、便將它們滙集起來、以成大部的『西游記』。

『朝野僉載』六云、太宗極康豫、太史令淳風見上、流淚無言。上問之。對曰、陛下夕當晏駕。太宗曰、人生有命、亦何憂也。留淳風宿。太宗至夜半、奄然入定、見一人云、陛下暫合來、還卽去也。帝問、君是何人。對曰、臣是生人判冥事。太宗入見冥官。問六月四日事。卽令還。向見者又迎送引導出。淳風卽觀玄象、不許哭泣、須臾乃寤。至曙求昨所見者、令所司與一官、送注蜀道一丞。上怪問之。選司奏、奉進止與此官。上亦不記。旁人悉聞、方知官皆由天也。寶顏堂秘笈本。

『舊唐書』一九一方伎傳云、僧玄奘、姓陳氏、洛州偃師人。大業末出家、博涉經論。嘗謂翻譯者多有訛謬、故就西域、廣求異本以參驗之。貞觀初、隨商人往遊西域。玄奘卽辯博出群、所在必爲講釋論難、蕃人遠近咸尊伏之。在西域十七年、經百餘國、悉解其國之語、仍採其山川謠俗、土地所有、撰西域記十二卷。貞觀十九年、歸至京師。太宗見之、大悅、與之談論。於是詔將梵本六百五十七部於弘福寺翻譯、仍敕右僕射房玄齡、太師左庶子許敬宗、廣召碩學沙門五十餘人、相助整比。高宗在東宮、爲文德太后追福、造慈恩寺及翻經院、內出大幡、敕九部樂及京城諸寺幡蓋衆伎、送玄奘及所翻譯經像、諸高僧等入住慈恩寺。顯慶元年、高祖又令左僕射于志寧、待中許敬宗、中書令來濟・李義府・杜正倫、黃門侍郎薛元超等、共潤色玄奘所定之經、國子博士范義頊、太子洗馬郭瑜、弘文館學士高若思等、助加翻譯。凡

成七十五部、奏上之。後以京城人衆競來禮謁、玄奘乃奏請逐靜翻譯、敕乃移於宜君山故玉華宮。六年卒、時年五十六、歸葬於白鹿原、士女送葬者數萬人。標點本。

『大慈恩寺三藏法師傳』十卷　唐慧立原撰彦悰補撰　『大正新修大藏經』巻五十に收錄。

魯迅給胡適之書簡二二〇八一四云、『劇說』又云、「元人吳昌齡西游詞與俗所傳『西游記』小說小異」、似乎元人本焦循曾見之。既云「小異」、則大到相同。可推知射陽山人演義、多據舊說。又『曲苑』內之王國維『曲錄』亦頗有與『西游記』相關之名目數種、其一云「二郎神鎖齊天大聖」、恐是明初之作、在吳之前。

『大唐三藏取經詩話』については拙稿第十三篇3を參照。

「唐三藏」　『南村輟耕錄』二五云、唐有傳奇、宋有戲曲唱諢詞說、金有院本雜劇諸宮調、院本、雜劇、其實一也。國朝院本雜劇、始釐而二之。〔中略〕偶得院本名目、用載于此、以資博識者之一覽。四部叢刊本

この後に子目を分けて相當數の雜劇の戲題を列擧している。その「打略拴搐」（意味未詳）の「和尚家門」に四種あり、そのうちの一種が「唐三藏」である。他の三種はそれぞれ「禿醜生」「窓下僧」「坐化」であるが、皆名目だけで內容が如何なるものかは全く分らない。ただ「唐三藏」という名によって「西天取經」の故事であろうと推測される。

「唐三藏西天取經」　『錄鬼簿』上云、吳昌齡西京人。「唐三藏西天取經」……「鬼子母揭鉢記」〔後略〕曹棟亭刊本（一九七八・上海古籍出版社排印本）

『魯迅藏書目錄』叢書部雜叢類云、棟亭十二種　清曹寅輯　民國十年（一九二一）上海古書流通處影印楊州書局重刻本二十册　第一册有「周氏」印。

魯迅は『棟亭十二種』所收の『錄鬼簿』によって、『納書楹曲譜』補遺一に收錄する「西游記」の「定心」がその佚

文であろうと考え、『大略』鉛印本に「一名「西遊記」、倘『納書楹曲譜』（補遺一）所摘者卽此本、則收孫悟空、加戒箍、火孩兒、猪八戒皆已見。」と書いた。その後一九二八年に日本で宮內省圖書寮藏本の『傳奇四十種』の中に『楊東萊評吳昌齡西遊記』六巻なる書が發見、次いで影印公刊された。書名に「吳昌齡」を冠していることもあって、當時はこの書がそのまま吳昌齡の作だと考えられた。この發見を承けて魯迅は訂正版に於て現行のように改めた。ところが一九三一年に天一閣で馬隅卿らによって抄本『錄鬼簿』が發見され、一九三七年には馬氏の逝去を紀念して天一閣本の寫本が公刊された。その巻上には次のようにある。

「吳昌齡西京人。西京出屯俊英傑、名姓題將鬼簿寫。走昭君、東坡夢、辰勾月、探狐洞、賞黃花、色目佳。西天取經、行用全別。眼睛記、狄靑撲馬、抱石投江、貨郎末泥、十段錦、段段和協。」

そして作品一覽には「西天取經老回回東樓叫佛、唐三藏西天取經」とあって題目が明示してある。ところで『納書楹曲譜』その他曲の集成書に引かれた「西遊記」は多く楊東萊本『西遊記』の各部分に一致するのに對して、天一閣本『錄鬼簿』に言う「西天取經」の老回回の部分は楊東萊本には全く含まれない。このことから孫楷第は、明末から淸に至る曲の集成書である『萬壑淸音』『北詞廣正譜』『九宮大成』『納書楹曲譜』『綴白裘』に引用される「西遊記」の片段を集め、檢討した結果、吳昌齡の作と認められるのは「回回」「北餞」の二折にすぎず、あとは元末明初の人楊暹（名又は訥、字は景言又は景賢）の雜劇『西遊記』つまり楊東萊評『西遊記』の各部分であることを考證した（一九三九年「吳昌齡與雜劇西遊記」、いま『滄州集』に收錄）。したがって魯迅が吳昌齡の作とした『納書楹曲譜』補遺一の「定心」は楊暹のそれであり、この部分は「一名」を「楊暹雜劇」と改めねばならない。ちなみに魯迅が眼を通した王國維『宋元戲曲考』（一九一五）には吳昌齡『西遊記』に觸れて「如吳昌齡之『西遊記』、其書至國初尙存、其著

錄於『也是園書目』者云四卷、見於曹寅『楝亭書目』者云六卷。」と述べていて、清初に殘っていたものは呉昌齢の作と考えられていた。

『魯迅藏書目錄』集部曲類云、『雜劇西遊記』原題元呉昌齢著　日本昭和三年（一九二八）東京斯文會據明萬曆刻本影印及鉛印本　一册

『日記』一九二八年三月十三日云、遇鹽谷節山、見贈『三國志平話』一部、雜劇『西遊記』五部、又交辛島驍君所贈小說詞曲影片七十四葉、贈以『唐宋傳奇集』一部。

書帳にも同じく記載がある。なおこの雜劇『西遊記』の正式の名は『楊東萊先生批評西遊記』で、鹽谷氏藏本を影印したものである。

『小說舊聞鈔』『西遊記』云、（『劇說』四）、元人呉昌齡『西遊』詞、與俗所傳『西遊記』小說小異。

〔魯迅〕案：『少室山房筆叢』（四十一）云、『輟耕錄』記元人雜劇、有「唐三藏」一段、今其曲尚傳、第不知即陶所記本否？世俗以爲陳姓、且演爲戲文、極可笑、然亦不甚虛也。三藏即唐僧玄奘。『獨異志』云、沙門玄奘、俗姓陳、偃師縣人也。幼聰慧有操行、唐武德初、往西域取經。行至罽賓國、道險虎豹不可過。奘不知爲計、乃鎖房門而坐、至夕開門、見一老僧、頭面瘡痍、身體膿血、牀上獨坐、莫知來由。奘乃禮拜勤求、僧口授『多心經』一卷、令奘誦之。遂得山川平易、道路開闢、虎豹藏形、魔鬼潛跡。至佛國、取經六百餘部而歸、其『多心經』至今誦之。據此、皆與今頗合。又元人散套亦有西域取經等事、蓋附會起於勝國、不始於今。而三藏之名、則又始於宋時、不始勝國。東坡『艾子小說』云、艾子好飲、少醒日、忽一日大飲而噦、門人密抽彘腸致噦中、持以示曰、凡人具五臟方能活、今公因飲而出一臟、止四臟矣。何以生耶。艾子熟視而笑曰、唐三臟猶可活、況有四耶？此雖

戯語、然宋世所稱可見。蓋因唐僧不空號無畏三藏、譌爲玄奘耳。（艾子疑非東坡、然其目已見『通考』、要亦出宋人。「聖教序」雖有三藏要文等語、匪玄奘號也。）唐三藏及西遊詞全本、今未見。『納書楹曲譜』有關於西遊之劇本三種、一曰「唐三藏」、錄「回回」一段、記三藏到西夏、回回皈依事、在續集卷二。一曰「俗西遊記」、錄「思春」一段、在外集卷二。二事皆爲「西遊」小說所無。一曰「西遊記」、在補遺卷一中、所錄凡四段。一爲「餞行」、皆尉遲敬德唱。二爲「定心」、記收孫悟空事、有「花果山有神祇、水簾洞影幽微。」「一筋斗、十萬八千里、勢如飛。」及加戒箍「恰便似釘釘入頭皮、膠粘在鬢髻。你那凡心若再起、敢着你魄散魂飛。爲足下常有殺人機、因此上與你師父留下這防身計」等語、與小說所敍相同。三爲「揭鉢」、述鬼子母揭鉢事、有云、「告世尊、肯發慈悲力。我着唐三藏西遊便回。火孩兒妖怪、放生了他。到前面、須得二聖郎救了你。」小說中無之、然其火燄山紅孩兒、與此極相類。四爲「女國」、有云「俺女王豈用猴爲將？俺女王也不用猪爲相、」欲獨留三藏、則又爲小說所有也。此『西遊記』、或卽焦循所以爲吳昌齡作。

7 全書之前九回……以至（第三十二回「唐三藏收妖過黑河」）　一五八十二

『大略』鉛印本、初版は「悟空爲所獲、其……」を「悟空被獲。書……」に作る。合訂再版で「悟空手所獲爽……」に作って句讀を切らずそのまま下に続けるが、意通ぜず、訂正版で現行の如くに正された。第七回引用文中、「猴王卽掣起」、『大略』鉛印本、初版は「猴王卽手掣起」に作り、合訂再版より第七版まで「猴王卽被掣起」に作り、訂正版で現行に改む。明朱蒼嶺刊本（古本小說集成本）は「猴王聽得卽掣」に作り、道光刊本に據る人民文學出版社本は「猴王聽得卽掣起」に作る。「入水中」、『大略』、初版では「鑽入水中」に作るが、合訂再版で「鑽」が落ちる。これは朱本、人民文學出版社本とも「鑽」があるから、魯迅の據った書も「鑽」があったと思われる。「魚鷹」、『大略』

鉛印本から三八年版全集まですべて「鷹鷁」に作り、五七年版全集で現行に改められたが、據る版本がちがうのだから元に戻すべきである。因みに朱本は「魚鷹」、人民文學出版社本は「水獺」である。「一鴇鳥」、これも『大略』から三八年版全集まで「一群飛鳥」に作る。文意は自己撞着しているが、これも元のままとすべきである。朱本、人民文學出版社本は「一鴇鳥」。「座在中堂」の「座」、『大略』、初版では「坐」。朱本、人民文學出版社本も同。「鐵索」、合訂再版のみ「鐵素」に誤る。第三十二回引用文中、『大略』以降第七版まで「那山前山后土地」下に讀點なく、「進洞中去尋」下を句點に作る。前者、因みに朱本、人民文學出版社本は「土地神」に作る。「把鼻子一捶」の「捶」字、通用するが三八年版全集までは「搥」に作る。これは朱本に同じ。『西遊記傳』に限って言えば、魯迅が引く所は朱蒼嶺刊本や人民文學出版社本よりもむしろ出處不明の上海古籍出版社排印本『四遊記』に近い。但しそれとも異同がある。また回數を表示している所からかなり後の刊本だと思われる。朱本にも道光刊本、人民文學出版社本にも回目はあるが回數はない。

近刊の書に次のものがある。

『四遊記』一九五六、一九八六年上海古籍出版社據古典文學出版社本而用嘉慶九如堂本及小蓬萊館本・坊刻本校勘排印本

『西遊記傳』四卷四十則　一九八四年人民文學出版社據道光十年刊本排印本即『中國小說史料叢書』本

『唐三藏出身全傳』四卷四十則　上海古籍出版社用ケンブリッジ大學ボードリアン文庫藏明朱蒼嶺刊本景印本即『古本小說集成』本。國立政治大學古典小說研究中心編『西遊記專輯』本

『師弟答問集』四四頁云、〔增田涉問曰、〕「一九六　最初ノ行ノ下　……。忽然眞君与菩薩在雲端云云……　老君ノ

誤植カ?」〔魯迅答曰、〕「no 眞君トハ卽チ天尊ノ元始ノコデショウ」。

〔又問曰、〕「孫悟空氏ノ金箍棒ノ圖解ハ

or

コンナモノデセウカ?」〔魯迅答曰、〕「no! 孫悟空氏ノ金箍棒ハ私モ未タ拜見ノ光榮ヲ有シナカツタ。思フニ普通ノ様ナ棍棒デ堅固ニナラセル爲メ両端ニ鐵ノ環ヲハメタモノデアラウ。ソウシテ孫ガ金持ダカラ鐵ノ代ニ黄金ヲ使ツタ。

←コレハイワユル「金箍」デシヨウ」。

8 復請觀世音至、以至且與參善知識之善才童子相混矣 一五九—六

『鬼母皈依』、『大略』鉛印本から第七版まで『揭鉢』に作り、訂正版で現行に改む。「卽用揭鉢盂救幼子故事者、其中有云」、『大略』、初版は「蓋用鬼子母揭鉢盂救幼子事者、中有云」に作り、合訂再版でそれぞれ「故事」「其中」の「故」「其」二字を附加し、訂正版で「蓋」を「卽」に作り、「鬼子母」を削った。「(巻三)」、『大略』より第七版まで「(『納書楹曲譜』補遺一引)卽此事、」に作り、訂正版で現行の如くに改む。但し『納書楹曲譜』に引かれた雜劇『西遊記』を、原本である楊東萊『西遊記』の文と差し換えた時に、行文が殆ど違わないためか、「火孩兒」の前に

「那唐僧」三字の科を加えること忘れた。これは補い、且つ句讀を「……西遊便回。那唐僧……」とすべきであろう。

「相混矣」の「混」を『大略』は「涉」に作り、初版以降「溷」に作り、五七年版全集で「混」に換えた。

魯迅給胡適之書簡二二〇八二一云、『納書楹曲譜』中所摘『西遊』、已經難以想見原本。『俗西遊』中的「思春」、不知是甚事。『唐三藏』中的「回回」、似乎唐三藏到西夏、一回回先搗亂而後皈依、演義中無此事。只有「補遺」中的西游似乎和演義最相近、心猿意馬、花果山、緊箍呪、無不有之。揭鉢雖演義所無、但火焰山紅孩兒當即由此化出。楊掌生筆記中曾說演西游、扮女兒國王、殆當時尚演此劇、或者即今也可以覓得全曲本子的。／再『西游』中兩提「無支祁」（一作巫枝祇）、蓋元時盛行此故事、作西游者或亦受此事影響。其根本見『太平廣記』卷四六七「李湯」條。全集一一。

『師弟答問集』四四頁云、〔増田涉問曰、〕「一九六頁　始両手相合、帰落伽山云。落伽山ニ帰ツタ（自動）ト——ヘ帰ヘシタ（他動）」　〔魯迅答曰、〕「落伽山ハ觀音様ノ居ル處、實ハ觀音ニツレテ彼ノ居ル處ニ歸ヘタノデアル」。

二〇〇一年十月九日